

---

# 看護スタッフにおける 看護ナラティブ交流会の取り組み

石黒真澄、松岡淳子、近江 薫、宮形 滋<sup>\*</sup>、原田 忠<sup>\*</sup>  
中通総合病院 血液浄化療法部、同 泌尿器科<sup>\*</sup>

## Narrative interaction nursing in Nursing staff measures

Masumi Ishiguro, Junko Matsuoka, Oumi Kaoru  
Shigeru Miyagata, Tadashi Harada  
Nakadori General Hospital

### I. はじめに

当院血液浄化療法部では、2009年度に看護スタッフにおけるケースレポート発表会を開催した。さらに、2010年度は、心に残った看護を十分に語り合うことで、看護のやりがい感を実感してもらいたいと考え、初めて看護ナラティブ交流会を試みた。交流会の様子と交流会後におこなったアンケート調査結果を報告する。

### II. ナラティブについて

医療におけるナラティブとは、「ナラティブ」は「物語」と訳され、患者が対話を通じて語る病気になる理由や経緯、病気について今どのように考えているなどの「物語」から、病気の背景や人間関係を理解し、患者の抱えている問題に対して全人的（身体的、精神的、心理的、社会的）にアプローチしていこうとする臨床手法である。

看護におけるナラティブとは、アメリカの看護理論家であるパトリシア・ベナーが、達人ナースの看護実践ナラティブから理論では明確にできない臨床知を見出した。川島は、看護実践の語りから看護研究の仮説を見つけ出せる<sup>1)</sup>と述べている。また、陣田は、ナラティブ交換会では、臨床知を共有し自己の看護のこだわりを発見し、強みとして看護を発展させることができる<sup>2)</sup>と述べている。看護ナラティブ交流会は、看護キャリア開発として活用され、看護のやりがい、喜び、共に成長し合う場として、注目されている。

### III. 方法

#### 1) 対象者

透析看護スタッフ15名。

ナラティブレポートの発表は、師長と異動直後者を除く12名が発表。

---

透析室経験年数は、10年以上3名、5～10年が2名、3～5年が2名  
3年未満が8名であり、1年未満は4名。

2) 交流会の開催期間と時間

H23年2月～3月

時間：16時～17時（60分）

1回の交流会で2～3名が発表、1回毎の参加人数は8～9名。

3) レポートの記載方法

1年間を振り返り受け持ち患者の中から心に残った事例を選び、レポートにまとめる。院内看護教育システムクリニカルラダー認定指定のレポート様式を使用。

4) ナラティブ交流会前の事前準備

レポートを冊子にして参加者に事前配布し、読んでから参加してもらう。参加者には、ナラティブについて説明し交流会の目的を理解したうえで参加する。

5) 交流会で特に気をつけること

レポートに書ききれない部分や自分の大切にしている看護について語ってもらうようにする。語られる側は、語りをまるごと尊重しながら聞き、共感したことアドバイスなど語りあう。好意的フィードバックをおこなう。

6) アンケート調査

対 象：透析室看護師15名

調査方法：ナラティブ交流会実施1週間後に、独自に作成した質問紙を使用してアンケート調査をおこなった。

倫理的配慮：研究の趣旨を説明し、個人が特定されないように配慮した。また、調査に参加しなくても不利益はないことを書面で説明した。

#### IV. 結果

1) 発表されたエピソード

「自己管理困難な患者への関わり」4例、「家族看護」3例、  
「透析導入時の看護」2例、「長期透析合併症患者の看護」2例、  
「手術を受ける患者の看護」1例。

2) 交流会の様子

司会進行は、師長、主任が行なった。レポートに書ききれなかった語りをひき出せるように、また、「自分の大切にしている看護」の語りを促し進行していた。

「長期透析合併症患者への関わり」についてのエピソードでは、関節硬縮や骨折による車椅子での生活など、合併症に苦しみながらも様々な障害を受容しようとする患者さんについて語られた。長期的関わりが必要な患者とどのように関係を築いていくか、患者との距離のとり方はどうしているかなど、透析経験の浅い看護師には学びになったという発言が聞かれていた。

「自己管理困難な患者への関わり」については、行動変容プログラムや患者の気持ちや意欲を

大切にしながら根気よく関わることの大切さが語られた。自己管理困難患者の対応については、他のスタッフも同じく難しさを共感していた。すぐに患者を行動変容することができなくても「やるべきことをきちんとやっている」「自分達の看護はまちがっていないよ」という好意的フィードバックがされていた。また、「重症の心疾患で亡くなられた患者」の事例では、ベテランの看護師から「導入時から患者にしっかりと向き合って指導できていれば、このような結果を避けることができたのではないか」という発言もあり、思わず感情が溢れだす場面もみられた。看護師として、どのような看護をしていきたいのかそれぞれの思いが語られていた。

### 3) アンケート結果

15名に配付し12名より回収された。

(1) 「交流会では、看護を共有することができたか？」の質問に対して

出来た6名、まあまあ出来た5名、

あまり出来なかった1名、出来なかった0名

<理由>

- ・日常のカンファレンスでは語れない看護の部分が共有できた。
- ・自分では気が付かない点を考えることができた。
- ・他のスタッフの看護を聞き勉強になった。
- ・長期的に患者と関わることを意味を知った。

(図1)

Q1 交流会では、看護を共有することができましたか？

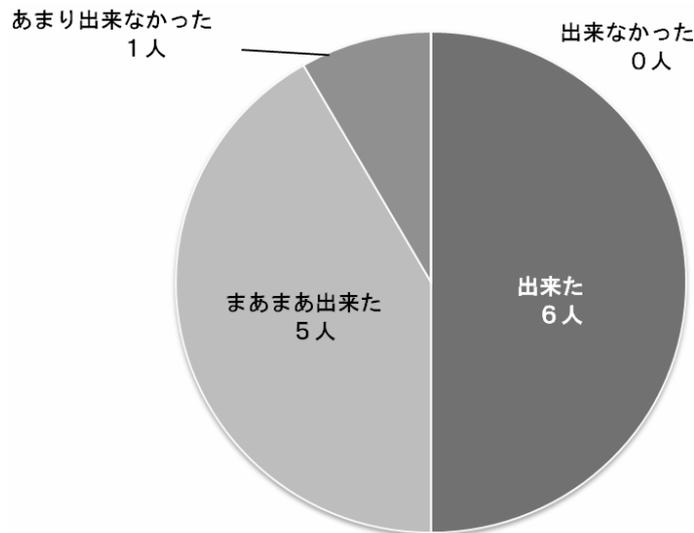


図1

(2) 「自分の看護が認められたと感じましたか？」の質問に対して

出来た6名、まあまあ出来た5名

あまり出来なかった1名、出来なかった0名

<理由>

- ・他者から評価してもらうことで、看護を続けていこうという自信をもつことができた。
- ・自分達の看護が間違っていないという実感につながった。(図2)

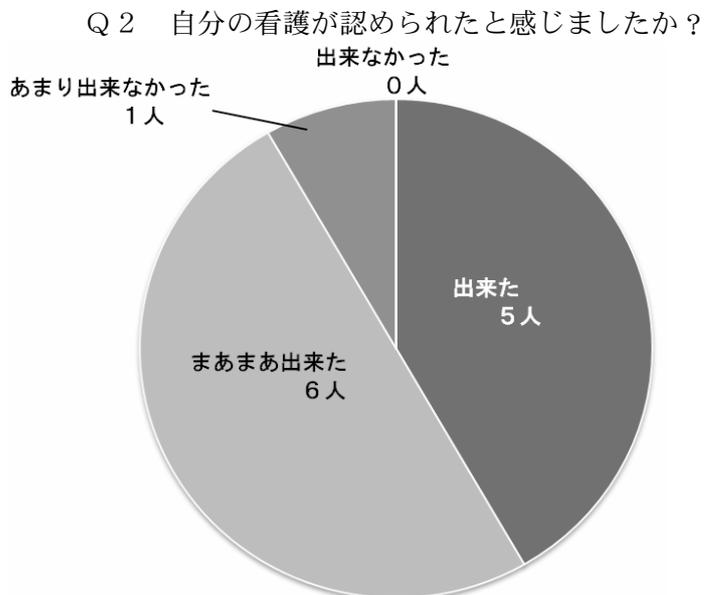


図2

- (3) 「看護のやりがいを感じる事ができましたか？」の質問に対して  
出来た3名、まあまあ出来た7名、  
あまり出来なかった1名、出来なかった1名

<理由>

- ・目標となる看護観を聞いた。
- ・看護のやりがいを共有できた。
- ・新たな気持ちで看護をしていこうと思えた。(図3)

Q 3 看護のやりがいを感じる事ができましたか？

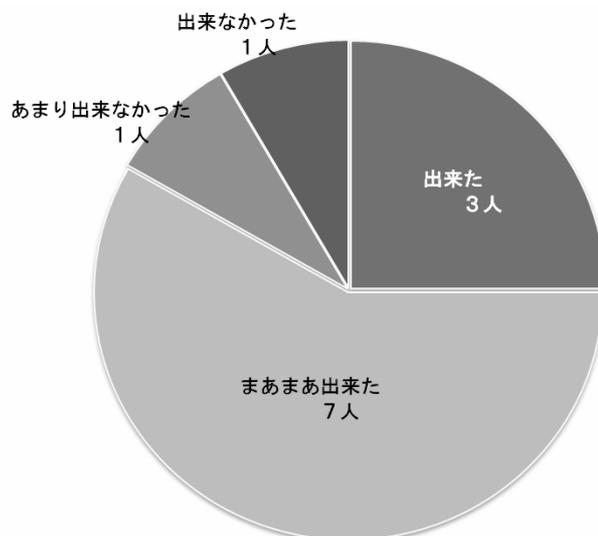


図3

(4) 「交流会では十分に語る事ができましたか？」の質問に対して

出来た2名、まあまあ出来た7名、

あまり出来なかった3名、出来なかった0名

〈出来なかったと答えた理由〉

- ・勤務の関係で参加できた回数が少なかった。
- ・少し堅苦しい雰囲気になってしまい残念。
- ・一人あたりのナラティブに十分な時間の確保が欲しかった。(図4)

Q4 交流会では十分に語る事ができましたか？

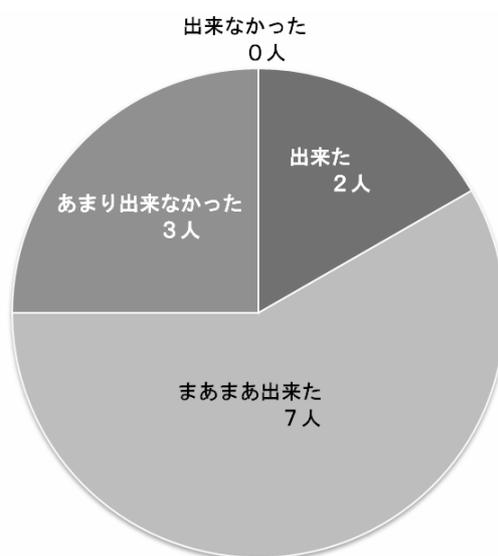


図4

## V. 考察

米田は、透析治療は、患者の全生涯を通じて行われるエンドレスケアである。治療自体と患者の特殊性により、そこで働く看護師のストレスは多大なものであり、それがケア意欲低下への影響を与えている局面が考えられる。<sup>3)</sup>と述べている。また、堀川は、トータルケアこそとくに看護師にとってもっとも固有の専門領域であろう。自分の行動の持つ重要な意味を再確認することができれば、視野が広がり、楽な考え方をする<sup>4)</sup>と述べている。透析看護において「自分たちの行っているケアの持つ意味」を再確認し、認め合うことは、透析看護スタッフにとって重要と考えた。しかし、日々おこなっている患者カンファレンスは、情報共有や患者問題を解決することが中心であり、自分たちの行なっているケアを再確認する場にはなっていないことが多い。2009年度当院血液浄化療法部看護スタッフは、ケースレポート発表会を開催した。発表会は、評価用紙を使ってレポートまとめ方や行なった看護について評価し、お互いの看護観を深めることができた。2010年度は、ケースレポート発表会をさらに発展させ「看護を語り合うことで、自分のおこなっている看護の持つ意味を確認する場面をつくりたい」と考え看護ナラティブ交流会を開催することにした。

---

今回の看護ナラティブ交流会では、一人一人の看護スタッフがおこなった看護実践を共有し認め合うことで、自分達の行っている看護の本質や意味を確認することができたと考える。当院の透析室スタッフは、透析経験年数3年未満が半数以上、1年未満は全体の4分の1を占めている。透析経験の短いスタッフには、他の看護師から語られたナラティブから、看護の仕事のすばらしさや目標となる看護観を見出して大きな学びの場になっていると考える。また、十分に語り合い認め合うことで新たな気持ちで看護をしていこうという自信に繋がっていると考える。今後の課題として、①一人のナラティブに十分な時間をかけて交流する。②リラックスした雰囲気の交流会づくり。③物語風にレポートを記載し、記述から十分なナラティブ表現ができる。の3点を考えた。より充実したナラティブ交流ができるように検討していきたい。

## VI. おわりに

ナラティブ交流会は自分たちの看護の力に気が付き、看護のやりがいにつながった。  
今後も看護タイプ交流会の開催を継続し看護を語り合う場面を大切にしたい。

## 参 考 文 献

- 1) 川島みどり：看護を語ることの意味、看護の科学者、2009
- 2) 陣田泰子：看護現場学の方法と成果、医学書院、2009
- 3) 米田千恵子：透析室における看護師の特徴、臨床透析 VOL.25, NO.3 : P311、2009
- 4) 堀川直史：ストレスへの対策と「こころの病気」発生のプロセス、臨床透析 VOL.25, NO.3 : P309-310